奥田英信・黒柳雅明編著

『入門開発金融
――理論と政策――』

日本評論社　1998年　v＋258ページ

中村（なかむら）まり

本書は，既存の開発経済学のテキストで不十分であった開発金融の全般的な枠組みを包括的にまとめた，開発金融論のテキストである。開発金融論は金融理論の応用分野のひとつではあるが，本書では途上国の開発過程で発生するさまざまな金融問題を経済学的に検討するという開発経済学に近い立場をとっている。執筆陣には日本輸出入銀行や国際金融機関に所属する人もおり，そこでの経験をふまえ，理論の紹介・解説に留まらず，具体的政策提言に結びつく内容となっている。また，タイの通貨危機・アジア諸国の金融不安といった最近の重要イシューも取り扱っている。

第1章から第3章では，マクロ経済理論と金融発展を結びつける理論を展開している。成長に必要なのは金融抑圧か金融自由化かと考えられていたのは，グローバル化以前のパラダイムである。ASEAN諸国の成長にみられるようなグローバル化以後の世界では，その成功のポイントは，外資主導工業化によって成長を加速しつつ，いかに地場金融部門を育成するかであると強調する。

第4章から第8章は，家計・企業・農村といった個別の金融市場構造をミクロ経済学的アプローチで分析している。途上国の資産選択に関して個人の資産選択理論から（第4章），また途上国の企業の資金調達に関してはモディリアーニ＝ミラーの定理，エージェンシー・コストとの関係などの理論的枠組みを提示しながら解説している（第5章）。第6章では，途上国農村における在来金融の問題をインターリンケージ取引，取引費用の存在や情報の非対称性といった概念を使って解説し，市場の整備とそれに必要な政策手段，次善策の可能性を探っている。第7章では政策金融の失敗例を具体的に挙げ，その失敗の原因は政策金融が民間金融機関の肩代わりとして情報を収集することが難しく，政策金融の目的を実現するための誘因が組織として確保し難いことにあると明言している。政策金融の評価は経済制度全体の中で検討されるべき課題であり，今後の実証分析が重要であると説いている。途上国における銀行の役割（第8章）はエージェンシー・コストを縮小し，資金の有効活用を促進することにある。1980年代に入って金融自由化政策に転換した途上国の地場銀行ではどのように生産効率が変化したのかについて，タイとフィリピンの規模の経済性，範囲の経済性に関する実証分析の結果から，銀行部門で技術進歩が観察されることを挙げ，自由化の影響を詳述している。

途上国への資金流入に関して，第9章から第11章では，開発における外国資金の役割，対外債務問題の変遷，公的資金協力の機能について解説されている。第12章は，1990年代に入って活発化した民活インフラ開発のその後の伸び悩みと途上国側の制度整備の問題点を指摘している。

第13章では，途上国のマクロ経済政策と金融政策の有効性についてさまざまな角度から理論を解説し，さらに第14章で関連した実証分析の結果を紹介している。第15章では途上国における銀行危機の原因と短期・長期の対応を挙げ，国際波及の防止を訴えている。

本書を通じて感じることは，もともと実物経済の発展を円滑化するために発生した金融が，システムのグローバル化，金融サービスの複雑化とともに，時には実物経済を阻害するまでの大きな経済主体になってしまい，それに対しての処方箋が政策レベル・市場レベルでも模索段階にあることである。こうした現状に対して，経済の研究領域でも，マクロ経済，国際経済，金融論といった棲み分けでは対応できなくなっている。本書も「入門書」とあるが，マクロ・ミクロの経済原論はもとより，内生成長論，情報の経済学，国際金融論といった応用経済学も知らなければ読みこなすことは難しく，時代の要求する研究領域の高度化・複雑化を反映している。

（アジア経済研究所広報部編集第1課）